

## きもの 着物

日本人が日常的に<sup>にちじょうてき</sup>着ているのはほとんど洋服であるにも関わらず、<sup>かか</sup>今もなお、着物は日本人に愛され続けています。特別な<sup>とくべつ</sup>儀式やパーティーなどの<sup>ざい</sup>際に、または特定の<sup>とくてい</sup>職業の人たちが<sup>しょくぎょう</sup>着物を<sup>ちゃくよう</sup>着用することがあります。着物は四季のある日本の<sup>しき</sup>気候に<sup>きこう</sup>適し、日本人の<sup>てき</sup>顔立ちや<sup>かおだ</sup>体型にもよく映る<sup>たいけい</sup>ように<sup>うつ</sup>進化し<sup>しんか</sup>続けてきました。

着物は平安時代まで遡る日本の<sup>へいあんじだい</sup>伝統的な<sup>さかのぼ</sup>衣装であり、<sup>でんとうてき</sup>様々な<sup>いしゅう</sup>種類があります。種類によって着用シーンが決まっているので、美しく着こなすためには、その場に合った着物を選ぶ<sup>ひつよう</sup>必要があります。結婚式や披露宴などで着る<sup>けっこんしき</sup>フォーマルな<sup>ひろうえん</sup>着物には黒留袖、色留袖、振袖などがあります。裾だけに模様が入っている<sup>くろとめそで</sup>黒地の<sup>いろとめそで</sup>留袖は、<sup>ふりそで</sup>背・<sup>すそ</sup>両袖・<sup>もよう</sup>両胸の<sup>くるじ</sup>五箇所<sup>せ</sup>に<sup>りょうそで</sup>紋が入っており、<sup>りょうむね</sup>最も<sup>ごかしよ</sup>格が高い<sup>もん</sup>既婚女性の<sup>もっと</sup>第一<sup>かく</sup>礼装<sup>きこん</sup>と<sup>だいいちれいそう</sup>されています。色留袖は裾だけに<sup>もよう</sup>模様が入る<sup>いろじ</sup>色地の着物で、五つ、三つ、一つと紋の数によってフォーマル度が変わりますが、既婚と未婚<sup>みこん</sup>に関わらず着用できます。振袖は袖丈が長いのが特徴で、全身に華やかな<sup>そでたけ</sup>模様が<sup>とくちょう</sup>施されており、<sup>ぜんしん</sup>未婚女性の<sup>ほどこ</sup>第一礼装に位置する着物です。他には、<sup>かた</sup>肩・<sup>ほら</sup>胸・<sup>そで</sup>袖・<sup>はら</sup>裾に<sup>ほうもんぎ</sup>模様が入った訪問着という<sup>りゃくれいそう</sup>略礼装があり、<sup>にゅうがくしき</sup>入学式や<sup>そつぎょうしき</sup>卒業式、<sup>かんげき</sup>フォーマルな<sup>はばひろ</sup>パーティーや<sup>そつぎょうはかま</sup>観劇など幅広い<sup>そつぎょうはかま</sup>場面に着ていけます。三月の卒業シーズンの<sup>ふうぶつし</sup>風物詩になっているのが<sup>そつぎょうはかま</sup>卒業袴を身にまとった<sup>すがた</sup>学生の姿です。夏のお祭りや花火大会でよく見かけるのは、<sup>きど</sup>気取らない場所でのみ着ることができる<sup>ゆかた</sup>浴衣です。着物だけではなく、<sup>おび</sup>帯にも<sup>むす</sup>種類や<sup>かた</sup>格、<sup>むす</sup>結び方がいろいろあり、<sup>てきせつ</sup>場面に合わせて適切に選ぶ必要があります。男性の着物の第一礼装は<sup>くろもんつき</sup>黒紋付に<sup>はおり</sup>袴と<sup>はおり</sup>羽織です。着物と羽織にそれぞれ五つ紋が付き、フォーマルな場で着用します。

着物の生地には<sup>きじ</sup>絹、<sup>きぬ</sup>木綿、<sup>もめん</sup>デニムなどと<sup>そざい</sup>色々な素材があります。格の高い着物は主に絹が使用され、<sup>おも</sup>生地<sup>しょう</sup>の<sup>そ</sup>染め方は<sup>お</sup>織り上がった<sup>がら</sup>白い生地<sup>がら</sup>に後から色や柄を染める「<sup>あとぞ</sup>後染め」<sup>もち</sup>が用いられます。カジュアルな着物は<sup>いと</sup>糸に<sup>いろづ</sup>色付けしてから織り上げる

「先染め」が多いようです。着物の模様は全く同じものがないと思えるほど多く、例えば、長寿を願う鶴、鳳凰、松竹梅などの柄付けは縁起が良く、お祝いの席で好まれます。他にも季節が反映された植物や花の柄、扇や短冊などを使った古典的な柄など多種多様です。近年、グローバル化が進むにつれて、洋風の柄を取り入れた着物や海外のデザイナーとのコラボレーションによるデザインも増えているようです。今、世界中で着物の認知度が高まりつつあり、日本関係の催し事で着物を着る外国人を見かけることも珍しくありません。しかし、着物についての知識が必ずしも浸透しているわけではなく、着物の左衽が必ず上に来るように着付けをしなければならぬという決まりが分からず、その逆の死装束を身につけてしまった失敗談を持つ人もいます。着物の世界は大変奥が深く、せっかくの美しい着物が台無しにならないように気をつけたいものです。

着物は今後、更にどんな進化を遂げるか期待すると同時に、日本の伝統も保ち続けてくれることを願って止みません。